

小惑星探査機「はやぶさ2」が持ち帰った小惑星「リュウグウ」の試料はさまざまな研究機関で分析・研究される。佐藤精機（兵庫真姫路市、佐藤慎介社長）は各国のさまざまな研究機関へ試料を運ぶための輸送容器の製造を担当した。精密加工の技術を用いて今後各国でのリュウグウの研究深化のための重要な役割を担った。

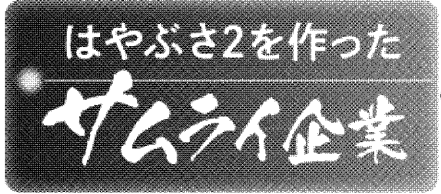
確実に閉める

リュウグウの試料は地球上の空気に触れさせないよう真空状態で分析される。各研究機関で分析をするにあたって、輸送する際も真空状態であることが必要だ。佐藤精機の製造した輸送容器は精度が高く、真空状態を約1カ月保たせることが可能。2019年に輸送容器の形が決まってから3年間で約300個を宇宙航空研究開発機構（JAXA）へ提供した。

輸送容器のデザインは大型放射光施設「Spring-8（スプリング8）」の維持・運転・管理を行う高輝度

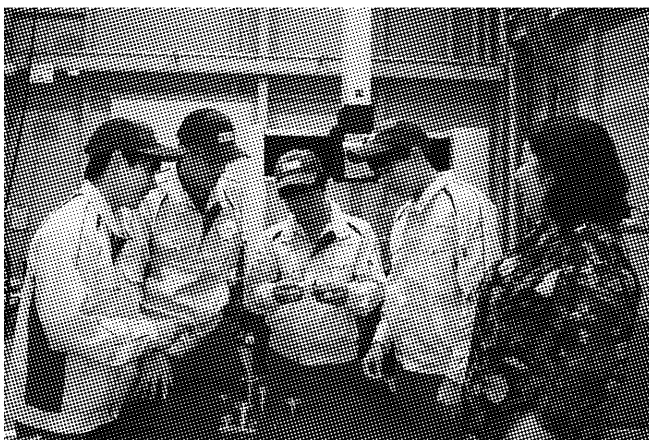
（姫路・岩崎左恵）

光科学研究センター主席研究員の上杉健太郎が行った。佐藤精機は以前からスプリング8などで研究を行う研究者用に実験に使用する道具類を提供していたこともあり、上杉から声がかかったという。JAXAなどの窓口として奔走していた常



試料の輸送容器

佐藤精機



「研究者の困りごとに提案できることも評価されたのでは」と佐藤哲子常務（右端）

るような方式を提案。採用され、佐藤精機の考えも取り入れた輸送容器が各研究機関へ運ばれている。

挑み続ける

小さい試料もあるため、輸送容器の中には20点以上の部品も入っている。輸送容器の製造には、マシニングセンターと旋盤での加工に2人、ネジの具合の調整や研究者との打ち合わせに1人、検査に1人と計4人の社員が関わった。マシニングセンターでは入社2年目の社員が活躍。佐藤は「2年目で誰でもできるわけではない。レベルの高い先輩技術者のサポートがあったからこそ」と話す。JAXAで使用した輸送容器は米航空宇宙局（NASA）からも注目されている。

真空状態 1カ月保持

リュウグウの宝物、世界に



マシニングセンターでは若手社員が活躍

おり、精度の良さが評価されている。同社では作業するだけでなく、顧客の相談にも提案できるようなエンジニアを育てることを意識している。難しいものを製造するためには頭を使い、手で加工する部分も大切だという。社長の佐藤慎介は「安定とお金だけ

でもなく常に前向きでパッションがある人材に来てもらいたい。さまざまな場所から来てもいい、社内でもインベションを起したい」と力を入れる。今後航空宇宙業界に知ってもらえるように展示会に出展するなどして、活動を続ける。人材確保や教育にも力を入れ、「ハイレベルなモノづくりを続けていきたい」（佐藤慎介）と意気込む。

（敬称略）